

情報リソースの共有で運用コストを低減

学内情報システムのアウトソーシングの基盤としての学術認証フェデレーション 東京農工大学

本学では学内情報システムを安定的かつ低コストで提供するため、情報システムのアウトソーシング化に着手した。そのアウトソーシングでは認証基盤が重要な鍵となるが、その1つとして検討しているのが、学術認証フェデレーションである。

課題

情報通信技術の多様化、高機能化が急速に進展する一方で、それらの技術を長期にわたる視点で実際に設計、導入、運用ができる技術者が不足している。企業においても技術者が不足している現状で、大学がシステムの設計、構築から運用、保守までを独自で行うことは困難となってきている。高いスキルを持った技術者を複数、かつ恒久的に確保し、そのための教育をする環境が減っている中、システムの継続性を担保するための課題は山積している。そうした現状を踏まえ、本学では IT リソースを内部で維持すべきもの、アウトソーシング化すべきものと切り分けて導入等をすすめている。アウトソーシングする場合には、認証基盤が鍵となるが、その1つとして学術認証フェデレーション(学認)の活用を検討していた。

解決策

学内の情報システムのアウトソーシングは長年の課題であった。しかし、現在稼働している情報システムを一気にアウトソーシングすることは業務を継続しつつ更新しなくてはならないため、費用面、運用面での不安も残る。そこでまず大学内の IT リソースについて、学内に残すものとアウトソーシングできるものに分けるところから始めた。

学内に残すものとして、セキュリティレベルが高く、学内での管理・保管が必要であり、学外への通信が途絶えても使用しなくてはならない情報を扱うシステムがある。一方、メールや大学業務用アプリケーションなどの他大学でも同じように使われているシステムは企業が提供しているサービスの方が費用面、運用面において利点があるため、アウトソーシングをすす

めていくことにした。特に、類似するサービスを複数大学で共有する仕組みや、各大学が持つリソースの共用を可能にする学認のサービスは、情報システムの継続性を保ちつつ利便性の向上を実現する手段として注目していた。

そして、平成 22 年度は第 1 段階として電子メールサーバの学外のデータセンターへの移設を計画し、年度末の本格運用を目指した。この本格運用と時期を同じくしてこれまでの認証基盤に Shibboleth 認証を連携し、学認が提供する学術無線 LAN ローミング基盤「eduroam」や、Google の利用をはじめ、各大学とリソースを共有できる環境の整備を急いでいる。

特に本学は海外から多くの留学生や教員や研究員を迎えており、一時帰国時にも現地から本学の情報リソースを使いたいという要望が出ているが、学認を利用することで世界のどこからでも学内のリソースを使えるだけでなく、学認が提携する他大学のリソースもシングルサインオンで使えるようになる。

結果

今後は第2段階として業務用アプリケーションのプライベートクラウド化に着手する。また、現在個別に契約している各種電子ジャーナルについても、ライセンスが切り替わるタイミングを待ち、順次学認が提供する電子ジャーナルサービスに移行する計画がある。これによって、ライセンス管理業務を軽減するとともに、利用者である学生や教員は学外からでも自由に電子ジャーナルを利用できるようになる。今後、情報システムを提供していく上で、学認を取り入れていくことで安定かつ便利な環境が実現できていくのではないかと期待している。

(東京農工大学 総合メディアセンター 櫻田 武嗣)

